

ニワトリ 人類を変えた大いなる鳥【立ち読み】

はじめに ニワトリを見れば、世界が見える 6

第1章 野生の原種を探して 14

謎めいた来歴／並外れた可塑性／荒野に消えた野鳥たち／世界で最後の生き残り／
ジャングルから家の裏庭へ

第2章 神の使いの鳥 43

古代エジプトに登場／インダス文明とタンドーリチキン／メソポタミアへ渡る／
古代ニワトリのDNA／宗教・儀式に欠かせない役割

第3章 二本足の薬箱 73

人間の健康を陰で支える／ワクチンを作る卵／宇宙船よりも複雑な構造／
医学の革命を促す

第4章 人類の移住ルートを知る鍵 93

太平洋を西から東へ横断する／新世界に最初に着いたのはポリネシア人？／
太平洋を移動した二つのルート

第5章 闘鶏の熱狂 121

闘鶏のスーパーボウル／人間の身代わりとなって／宗教から娯楽へ／バトル・ロイヤル

第6章 女王の趣味から大流行へ 151

ヴィクトリア女王への贈り物／ロンドン初の家禽品評会／裏庭飼育という「道楽」

第7章 ニワトリの起源と進化 177

進化論の証拠となる／ディクソン牧師とダーウィン／最古の祖先／
家畜化は食料にするためではなかった

第8章 小さな王 203

進化の真価が問われる場所／風見鶏からサタンの手先まで／
「チキノサウルス」を作る／雌雄の違いはホルモンではなく、細胞が決める

第9章 癒やし之力 230

生贄——信仰の中核／贖罪の日／平等な社会を築く／古代ローマの鳥占い

第10章 産業ビジネスへの進展 260

フライドチキンが広まったわけ／ニワトリ機械／女性たちの仕事、国家安全保障／
「明日のニワトリ」コンテスト／スーパーマーケットやファストフードに最適

第11章 影の都市 291

鶏肉議員団の結成／数が増えるほど、姿が見えなくなる／絶滅よりも悪い運命／
「家禽の女王」を育てる／消費者の食へ方を変える

第12章 快適で健康な環境を 325

天性の数学者にして直観物理学者／家禽の精神病院^{マッドハウス}／アフリカ全土の農家へ

第13章 新たな関係を築く 342

地元のニワトリvs産業用ニワトリ／鳥インフルエンザの影響／
小規模農業の復活／最後の大義

謝辞 361 解説 362 注 (www.intershift.jp/niwa.htmlよりダウンロードいただけます)

参考文献 (www.intershift.jp/niwa_b.htmlよりダウンロードいただけます)

※文中、小さな()は訳者による注記です

はじめに ニワトリを見れば、世界が見える

ニワトリを見れば、世界が見える

——ダナ・ハラウエイ『犬と人が出会うとき』（青土社）

世界中のネコとイヌとブタとウシの数を合計しても、ニワトリの数のほうがまだ多い。地球上のあらゆるネズミの数を足しても、まだまだ届かない。ニワトリは世界中で最も広範囲に分布している鳥類で、最もありふれた畜産動物なのだ。この地球上には、常時二〇〇億羽以上のニワトリが生息している。ヒト一人につき三羽の割合だ。鳥類でそれに次ぐ個体数なのはコウヨウチョウだが、アフリカに棲むこの小鳥の総数は二〇億羽程度にすぎない。

世界中で一カ国と一大陸だけ、ニワトリのいない場所がある。ローマ教皇フランシスコ一世の食卓に定期的に並ぶ皮なし胸肉がローマの市場で購入されているのは、小さなヴァチカン市国には鶏小屋を置くスペースがないからだ。そして、南極大陸ではニワトリはタブーとされている。南極のアムンゼン・スコット基地の新年会では鶏手羽のグリルが定番料理なのだが、南極大陸に関する国際条約により、ペンギンを病気から守るため、生きたニワトリも生の鶏肉も輸入を禁じられているのだ。それにもかかわらず、コウテイペンギンのヒナの大半は、一般的なニワトリの持つウイルスにさらされている。

こうした例外があるということが、すなわち規則のある証拠なのだ。シベリアから南大西洋のサウスサンドイッチ諸島に至るまで、ニワトリはどこにでも存在しており、NASAはニワトリが火星旅行を生き延びられるかどうか研究している。南アジアのジャングルの茂みに起源を持つこの鳥は、いまや人類の最も重要なタンパク源なのだから、地球を離れる際に連れて行かないということはありそうにない。都市が成長して住民の食欲が増すにつれて、このありふれた鳥の個体数も増え、依存度もますます高まっていく。アメリカの経済学者ヘンリー・ジョージは、一八七九年に次のように記している。「ジェイホーク（南北戦争当時カンザス州やミズーリ州など奴隷制を支持する諸州を荒らし回ったゲリラのことだが、ここではホーク「タカ」の意味にもひっかけている）も人間もニワトリを食べるが、ジェイホークが増えるとニワトリが減るのに対して、人間が増えるとニワトリも増える」

最近まで私は、この生き物が一万五〇〇〇種に及ぶ哺乳類と鳥類の中で人類にとって最も大切な伴侶となつたのはなぜかと問うことなど、まったく考えてもみなかった。人類が狩猟採集民としての静かな生活を捨てて、騒がしい都市、世界帝国、世界大戦、ソーシャルメディアを選ぶに至った理由と経緯を追い求めるため、私は中東、中央アジア、東アジアの遺跡発掘現場へ取材に行っていた。この謎めいた根本的な転換による都市生活への移行は、六〇〇〇年前に中東で始まり、いまま地球を大きく変え続けている。歴史上初めて都市生活者の人口が地方生活者の人口を上回ったのは、つい一〇年ほど前の話だ。

アラビアの海岸で作業中の発掘グループが、四〇〇〇年以上前にインドの商人がモンスーンを克服して外洋を航海していた証拠を発見したという話を聞いて、私はその記事のある雑誌に売り込んだ。青銅器時代の冒険心あふれる船乗りたちが国際貿易を創始して、最初の世界経済の火付け役となり、エジプトの石工がギザのピラミッドの仕上げをしていたころに、ヒマラヤの材木やアファガニスタンのラピスラ

ズリをメソポタミアの大都市へ運んでいたのだ。私は編集者への売り込みの中で、古代インドの貿易品の残骸と一緒にニワトリの骨が発掘されたことにもついでに触れて、ニワトリが西洋に登場したのがそのころだったのかもしれないと話した。

「それは面白いな」と編集者は言った。「ニワトリを追ってみよう。どこから来たのか？ なぜ人間がこんなに大量に食べるようになったのか？ そもそも、ニワトリとは何者なんだ？」。私はしぶしぶ承諾して、数週間後、オマーンの海辺の村に到着した。この海岸の発掘現場で作業をしているイタリアの考古学チームが、アラビア海で午後のひと泳ぎを終えて帰ってきた。ニワトリの骨？ 「ああ」と発掘ディレクターが濡れた髪をタオルで拭きながら言った。「あれは誤認だったようです。たぶん、作業員の誰かの昼飯の残骸でしょう」

ニワトリには古代バビロニアの戦車を引いたり、中国から絹を運んだりといった功績がないので、考古学者や歴史学者がこの鳥について考察する機会はあまりなかったし、人類学者はヒトがニワトリに餌をやる場所よりもイノシシを狩るところを見たがるものだ。家禽学者はできるだけ効率よく穀物を肉に変えることにひたすら執着し、ニワトリが世界中に広まった道筋をたどったりはしない。人間社会の形成における動物の重要性を認識している科学者ですら、ニワトリのことは見落としがちだ。ベストセラーとなった『銃・病原菌・鉄』（草思社）の著者ジャレド・ダイアモンドは、ニワトリを「小型哺乳類や鳥や昆虫」というカテゴリーに分類している。有用ではあるけれども、たとえば雄ウシほどの注目には値しないというわけだ。

負け犬や陰の功労者は、ジャーナリストの大好物だ。ニワトリはあまりにも過小評価されていて、法律上は目に見えない存在となっているほどなのだ。その肉と卵は都市の住民と産業労働者の活力源だというのに、食用として飼育された場合、アメリカ国内の法律では家畜類として——動物としてすら——みなされない。「都会育ちの人々の間では、ニワトリは名誉ある地位を得ているとは限らない」と、作家のE・B・ホワイトは記している。そういう人々がたとえニワトリのことを考えたとしても、「ポードビルから抜け出てきたような喜劇の小道具として」だという。ノンフィクション作家のスーザン・オーリアンは、ニワトリの裏庭飼育ブームを扱った二〇〇九年の『ニューヨークカー』誌の記事で、ニワトリこそ「理想の鳥」なのだと断言した。それでも最も愛されているペットという称号は、相変わらずイヌとネコが分け合っている。

もしイヌ科とネコ科に属するすべての動物が明日消滅してしまい、わずかばかりのインコとスナネズミも一緒に消え失せてしまったら、大勢の人々が嘆き悲しむことになるだろうが、世界経済や国際政治に及ぼす影響は最小限で済む。しかしながら、世界から突然ニワトリが消えたなら、即座に大惨事になるだろう。二〇一二年、メキシコ・シテイで何百万羽ものニワトリが病気で殺処分されたために卵の価格が急騰すると、デモ隊が街頭に繰り出し、新政府は混乱に陥った。この騒動は「重大なる卵危機」と呼ばれたが、それもそのはず、メキシコ人は一人あたりの卵の消費量が世界一なのだ。同じ年にカイロでは、高価な鶏肉に触発されてエジプト革命が起こり、次のようなスローガンのもとにデモ隊が集結した。「あいつらはハトやニワトリを食べてるが、おれたちは毎日豆ばかりだ」。近ごろイランで鶏肉の価格が三倍になったときには、警察のトップからテレビのプロデューサーへ、鶏肉を食べる人の映像を送らないようにという警告があった。焼いたケバブを買えない人々の暴力行為を誘発するのを避けるためだ。

ニワトリは、静かに、だが容赦なく、不可欠なものとなった。ほとんど飛べないけれども、国際間の

輸出入を通じて世界一の渡り鳥になったのだ。一羽のニワトリのさまざまな部分が、それぞれ地球の反対側にたどり着くこともあるかもしれない。足は中国へ、もも肉はロシアへ、手羽はスペインへ、腸はトルコへ、骨はオランダのスープ製造業者へ、そして胸肉はアメリカとイギリスへ。こうしたビジネスの国際化が広がると、カンザス州のトウモロコシがブラジルのニワトリを太らせて、ヨーロッパの抗生物質がアメリカのニワトリの病気を防ぎ、インド製のケージに南アフリカのニワトリが入るようになるわけだ。

「商品は一見したところでは、きわめてわかりやすい、ありふれたもののように見える」とカール・マルクスは『資本論』に書いている。ところが分析してみると、その商品は「形而上学的な小理屈や神学的な機微に富んだ非常に奇妙な代物」へと変わるのだという。私は世界中に広がるニワトリの足跡を追っていくうちに、それが形而上学的かつ神学的な意味合いに満ちていることを知って驚いた。魔法の鳥としてアジアのジャングルから現れると、全世界に散らばり、王室に集められた珍獣の中でも注目を浴び、未来への導き手として重要な役割を演じ、光と復活を伝える聖なる使者に変身した。闘鶏場で死闘を繰り広げて人々を楽しませ、万能の薬箱として役に立ち、戦士や恋人や母親たちを元気づけてきた。バリ島からブルックリンまでさまざまな地域の伝統の中で、何千年も前からずっと、私たちの罪を引き受けてくれている。これほど多くの社会と時代にわたり、これほど多くの伝説や迷信や信仰を招いてきた動物は、ほかには存在しない。

ニワトリが世界を横断したのは私たちが連れて行つたからで、その旅は何千年も前に東南アジアで始まり、道中ずっと人間の手助けが必要だった。広いメコン川を下る丸木舟に載せた竹かごの中で眠り、中国の市場町へののろろと進む雄ウシに引かせた荷車の中でやかましく鳴き、商人の背負う枝編み細工のかごの中でひしめき合いながらヒマラヤ山脈を越えたのだ。船で運ばれて太平洋、インド洋、大西洋を渡つたニワトリは、一七世紀までには定住者のいる大陸すべてのほぼ至るところに棲むようになった。そしてこれまでに、ポリネシアの入植者の糧となり、アフリカ社会を都市化させて、イングランドでは産業革命以降に飢饉を防いでいる。

チャールズ・ダーウィンは進化論を確立するためにニワトリに頼り、ルイ・パスツールは世界初の近代的なワクチンを作り出すのに利用した。ニワトリの卵は、科学の研究が始まってから二五〇〇年以上が経つたいまもなお最も重要なモデル生物で、毎年インフルエンザワクチンを製造する入れ物として使われている。家畜化された動物として最初にゲノム配列が決定されたのもニワトリだ。その骨は関節炎の痛みを和らげてくれるし、雄鶏の鶏冠は顔の皺を伸ばしてくれるし、そのうち遺伝子導入ニワトリが多数の薬を合成してくれるようになるかもしれない。また、田舎の貧しい母子家庭がニワトリを飼えば、必要なカロリーやビタミンを確保して栄養失調を防げるだけでなく、その収入が生活難にあえぐ一家を貧困から脱出させてくれるだろう。

ニワトリは昔もいまも、いわば羽の生えたスイス・アーミー・ナイフで、与えられた時間と場所にに応じて必要なものを提供してくれる万能動物なのだ。この可塑性のおかげでニワトリは最も有益な家畜となったわけだが、その点は私たち自身の歴史をたどる上でも役に立っている。ニワトリは鳥の「カメレオンマン」のようなもので、私たちの変わりゆく欲望や目標や意図——立派な品物、真実の語り手、奇跡を起こす万能薬、悪魔の道具、悪魔払いの祈祷師、途方もない富を生む財源——を映し出す不気味な鏡であり、人類の探検、発展、娯楽、信仰を示す標識なのだ。考古学者はいまでは簡単なふるいを使つて、ヒトがいつどこでどのように暮らしていたかを教えてくれるニワトリの骨を集めているし、複雑な

アルゴリズムと処理能力の高いコンピュータのおかげで生物学者はニワトリの遺伝学的な過去をたどることが可能になり、それは私たち人類の過去とぎわめて密接に結び付いている。さらに、長い間虐待されてきたニワトリの脳を研究している神経科学者は深い知性の兆しを発見して人々を動揺させており、それに加えて私たち自身の行動に対する興味深い洞察も得られつつある。

現在では生きたニワトリは都市生活の中からはほとんど姿を消していて、その大多数は人知れず点状する巨大な倉庫のような養鶏場と屠畜場の中にある。フェンスで囲まれた、一般人は立ち入り禁止の場所だ。現代のニワトリはテクノロジーの素晴らしい功績であると同時に、工業型農業に関する悲しむべき悪夢のような事柄すべてのシンボルにもなっている。歴史上最も巧みに作り変えられた動物は、世界で最も頻繁に虐待されている動物でもあるのだ。好むと好まざるとにかかわらず、私たちは世界の都市の未来のよりどころとしてニワトリを選び出し出しておきながら、その大半を見えないところへ置き、忘れてしまっている。

欧米で広まっているニワトリの裏庭飼育ブームは、農場で日々目にする生と死の現実からあまりにもかけ離れた都会生活に対する反応で、消えゆく田舎の伝統と再びつながるための安価で手軽な方法をニワトリが提供してくれるのだ。この流行は工業生産されている何十億羽ものニワトリの生死に関する改善には結び付かないかもしれないが、はるか昔の濃厚で複雑な関係の記憶が私たちの中によりがえるのではないだろうか。この関係があったからこそ、ニワトリは人間の最も大切な伴侶になったのだ。今後はニワトリに視線を向けるようになり、その姿を目にすれば、いままでとは違ったやり方で扱い始めるかもしれない。

ニワトリから遠ざかりながらもますます依存を強めている私たちがだが、勇気や臆病さ、粘り強さや利己主義など、さまざまな人間の特徴や感情を表現する言い回しは、相変わらずこの鳥としっかり結び付いている。文芸批評家のジョージ・スタイナーもこう言った。「すべては忘れられていく。だが、言語だけは違う」。私たちは「生意気 (cocky; cock は雄鶏)」だったり、おじけづいたり (chicken out; chicken はニワトリ)、尻に敷かれたり (henpecked; 元の意味は「雌鶏につつかれる」)、慎重に行動したり (walk on eggshells; 元の意味は「卵の殻の上を歩く」) する。アイデアを企んだり (hatch an idea; hatch は「孵化させる」)、腹を立てたり (get our hackles up; 元の意味は「頸羽を逆立てる」)、実権を握ったり (rule the roost; 元の意味は「鶏舎を支配する」)、気に病んだり (brood; 元の意味は「卵を抱く」)、歓声を上げたり (crow; 元の意味は「時をつくる」) する。私たち人間は、もしかすると自分では認めたくないほどいろいろな意味で、タカやハトやワシよりもはるかにニワトリに似ている。私たちは庭先を歩き回るあの鳥たちと同じように、優しいけれど狂暴で、穏やかだけど興奮しやすく、優美だけれどもぶぎまで、空を飛ぶことに憧れながら、いまだに地表に縛られているのだ。

もし世界からニワトリが消えたなら？ きつと各地でパニックが起きるに違いない。鶏肉は牛肉・豚肉などと比べて国際的な生産・消費量が急増しており、とりわけ新興国・途上国での需要がぐんと伸びている。安価で栄養価の高い肉や卵は、多くの庶民の健康を陰で支えてきた。その膨大な加工食品も含めて、人類にとってますます不可欠な食材となり、成長する巨大都市のエネルギー源にもなっている。もし私たちが他の惑星へ移住する時がきたならば、最も重要なタンパク源としてニワトリをまず同行させるだろう（実際、NASAはニワトリが惑星間旅行に耐えられるかどうかの実験をしており、可能と結論づけている）。

食材だけではない。インフルエンザの世界的流行を食い止めるのにも、ニワトリは重要な役割を担っている。インフルエンザワクチンを作る入れ物として、卵が使われているのだ。「宇宙船よりも複雑な構造」を持つ卵は、ミニチュア製薬工場としても医療の未来に貢献しつつある。古代ギリシャで雄鶏が癒しと医療の神に供えられたように、ニワトリは古来から「二本足の薬箱」として重宝されてきた。完全栄養食品と言われる卵はもちろん、あらゆる部位がさまざまな疾患に処方されてきたのだ。

人類のいる至るところにニワトリはいて、今日、その数は二〇〇億羽！にまで達している。ニワトリの原種は、東南アジアの森に棲むセキショクヤケイ（赤色野鶏）とされるが、この鳥は肉付きが悪いうえにとても用心深く、「飼い慣らせないヒョウ」のようだ。そんな野生の鳥が、いつたいどのよう人類とともに地球のあちらこちらを渡っていくほど、深い仲になったのか？ 詳しい経緯は本書に譲ると

して、そもそも人類とニワトリのつきあいは食料として始まったものではなかった。

人類とニワトリの当初の関わりを考えるとつかかりは、日本神話にも見られる。天照大神が天の岩戸に隠れてしまった時、呼び戻すために連れて来られた動物は、神の使いであるニワトリだった。伊勢神宮などの神社でニワトリが大切に扱われているのも、そのためだ。世界各地でニワトリは太陽や精霊への信仰などとともに、魔術的シンボルとして畏敬されてきた。帝国を築いた古代ローマでも、鳥卜官と呼ばれる神官が、ニワトリのお告げによって国家の大事を取り決めていたほどだ。ニワトリの家畜化も農業以前、つまり食料としてではなく、信仰・儀式（生贄を含む）や、実用（骨は縫い物や刺青に、羽は飾りに、肉・卵は薬に、暁の鳴き声は時計に）、そして娯楽（闘鶏）のためだった。とりわけ闘鶏は儀式・占いを起源とし、遊興として広まっていくが、アジアから世界各地へのニワトリ渡来の主要因ともされる。

こうして人類の同伴者となったニワトリは、私たちの祖先たちが大陸を越えて移動していくルートを知る鍵ともなる。たとえば、コロンブス以前に旧世界と新世界の交流はあったのか？ あるいは広大な太平洋を人類はいつ頃、どのような経路で移住していったのか？ 各地に遺されたニワトリなど動物の骨のDNA配列を調べることによって、さまざまな移住経路をシミュレートできるのだ。その結果、太平洋の移住には二つのルートと興味深い段階のあることが発見されている。

ニワトリが人類とともに世界中に広がることができたのは、驚くべき可塑性があるからだ。ニワトリは「羽の生えたスイス・アーミー・ナイフ」のような万能生物だという。つまり、さまざまな品種を作り出すことができ、雑多な餌を食べ、各地の気候に適応し、狭い土地でも飼うことができる。この抜群

の変幻自在な能力が、人類の飽くなき欲求に応えつづけ、ついには工業製品のように統御された品種を生み出すにいたる。

ニワトリの産業化への発火点は、太平洋の測量の任に就いていたある悪名高い艦長による、ヴィクトリア女王への贈り物だった。この贈り物——アジア産のニワトリ——をきっかけに、女王夫妻はニワトリ飼育に熱意を注ぐようになり、やがて市井の人々にも熱狂的ブームとして波及していく。品評会が催され、人々は立派なニワトリを育てようと競い合った。ブームはアメリカにも飛び火する。全国的な家禽展示会が開かれ、新種のニワトリも次々と生まれていく。こうしたブームが下地となり、やがて二度の大戦を経たあとに、産業用として世界を席卷する品種がアメリカで作られるのだ。それはまさに人間による「創作」だった。目指すべき豊かな肉付きの軀の模型まで用意され、理想的なブロイラーへ向けて改良が繰り返された。今日でも、クルマのモデルのように新しい品種が次々と創作されている（その名も、ロス308、コップ700などまるでクルマみたいだ）。こうしたニワトリの遺伝的形質はごくわずかな育種企業が握っており、農家は企業から次の世代を買わなければならない。

ニワトリは平等社会を進めるのにも貢献している。たとえば、村落共同体において、ウシなどの大型動物は男たちが管理しており、富と名声の源でもあった。一方、ニワトリの飼育は女たちの仕事だった。しかしニワトリが入手しやすくなったために、こうしたウシ・エリート階級の男というヒエラルキーが崩れ、より平等な社会を築く助けになった地域がある。アメリカにおいても、当初は女性や黒人たちがニワトリを飼育し、売買することで家計の足しにしたり、起業した女性もいた。ちなみに、あの有名なフライドチキンのレシピも、家計をやりくりしていた南部のある主婦の料理本から広まったのだ。

ヴィクトリア朝時代のニワトリ熱は、科学の進展にもかかわっている。当時、進化論の構想を練っていたダーウィンは、ハトやニワトリに関心を集中させていく。ちょうど世界各地からニワトリの新種がイギリスにどつと入りこみ、手軽に収集できるようになっていた。ダーウィンの研究は、こうした時代動向にも後押しされて進められていたのだ。

進化と言えば、ニワトリを含む鳥類は、恐竜の末裔であることがわかっている（T・レックスのアミノ酸配列のうちおよそ半ダースが、ニワトリのものと完全に一致する）。また、ニワトリの認知能力の研究も進められており、かなりの「知性」を持っているらしい。長いあいだ、あがめられ、畏敬されてきたこの鳥の力が、改めて再発見されているようだ。しかし、本書でも描かれるように、今日の産業化したニワトリの状況は、「絶滅よりも悪い運命」に置かれている。その強烈な栄光と悲惨——それは、この類い希な生き物に自身の欲望を反映させてきた私たち人類が負っているものでもある。

本書はニワトリを鏡とした文化・文明論だが、ニワトリの足跡を求めて世界を飛び回るルポルタージュでもある。野生種が棲むベトナムの森、ドイツの製薬工場、ハワイの洞窟、マニラの闘鶏場、ベネズエラのスラム街、ダーウィンのニワトリ標本が保存された博物館、バリ島の生贄、ブルックリンの「贖罪の日」儀式への潜入、「家禽の女王」を育てるフランスの田舎、イタリアの修道院の地下にある研究室、イラク北部のヤジディ教徒の聖地……本書にみなぎる熱量は、まるでみずからは物語ることのできない愛すべき者らの声を懸命に聞き取ろうとしているかのようだ。